

知事と県民の意見交換会（雄勝地域振興局）議事要旨

- テーマ：誰もがつながり、支え合う共生社会づくり
- 日時：令和元年7月5日（金）10：00～12：30
- 場所：湯沢市ふるさとふれあいセンター かしま館

知事挨拶

県が政策立案を行うにあたり、より現場感覚に近いものにするには机上の組立てだけでは難しい。日頃、地元選出県議が地元での活動を通して得た声を、議会を通じて参考にする。あるいは、ふだん、様々な会合等で団体・組織の長から話を聞く機会も多い。無論、各団体の長の話もスキームの大枠を整える上では大変参考にはなるが、きめ細かな運用部分を整えるとなると、包括的な仕掛けだけではうまくいかない。

このため、農業であれば若手後継者、商工業は若手従業員、現場で実際に汗をかいて悩んでいる方の意見を聞くことがとても大事だと考えている。

今日は「誰もがつながり、支え合う共生社会」をテーマに話し合う。かつて、この「共生社会」という言葉は使われることはなかった。今後、ますます少子高齢化、人口減少が進んでいく中、行政が全てをカバーできればよいが、国も、県も、市町村も財源上の制約から、やれる範囲は限られてくる。

ただ、そうした中においても、住民が住み慣れた地域で安心・安全に暮らすことは基本。大切なのは自助、共助、公助、これらの組合せ。人口減少や少子高齢化、過疎化といった課題を解決するためには、地域に住む皆さんが、自分の仕事や活動の範囲を超え、共に支え合う社会をつくりあげることが必要になる。

実は、今日の「共生社会」というテーマ。大変難しいテーマといえる。商業振興、観光振興などは単純な切り口だが、共生社会は、全ての分野、仕事、生活、地域特性など全てに関わる。仮に、ふだん、皆さんが取り組んでいる活動が、地域を支える意味合いを持つと意識していなくとも、結局はそこに結び付く。つまり、どんな仕事も、あるいはどんな日常の行動も、必ずどこかで地域と結び付くといえる。

ということで、今日はいろいろな立場の方から、日頃どんな活動をしているのか、あるいは活動の中で何を悩み、今後どんなふうに地域を描いていきたいのかをお聞きし、その中から県ができること、市町村ができること、それぞれ整理、ピックアップし、より現場に身近な政策立案に結び付けていきたい。実際、これまでもこうした意見交換から、政策やいろいろな事業に結び付いたものがたくさんある。皆さんのお話をじっくり聞いて、勉強したいのでよろしくお願いしたい。

参加者自己紹介

（司会：A氏）※以後、司会と表記

知事には、湯沢雄勝によるこそお越しいただき感謝している。湯沢雄勝の現場の声を、拾っていただければと思う。

私は、ふだん、市基幹相談支援センターとして障害者の相談に当たっている。同様のセンターは県内にまだ5箇所しかない。今日のテーマと同じく、健常者と障害者の共生社会を目指しており、サービス利用の際の計画プランナーというよりは、もっと一般的な、総

合的な幅広い相談に乗る役割を担う。このほか地域づくりに関わる業務も、半分を占める。
では、最初に一人ずつ自己紹介をお願いしたい。

（Ｄ氏）

地元岩崎在住。今日は、このふるさとふれあいセンターをこうした意見交換会場として活用していただき、とてもうれしく思っている。建物は、国の補助金（秋田の木・利用推進木造公共施設整備事業）を活用したもので、岩崎地区自治会議が指定管理を行い、私もその組織の一員として活動している。

８０代の私が岩崎地区で地域活動を始めてから、５０年。今日は共助組織「岩崎生活サポーター」の活動を中心にお話をしたい。今日は世代の違う皆さんからいろいろな話を聞けることを大変楽しみにしている。

（Ｅ氏）

兵庫県出身。サラリーマンをやっていたが、縁あって「地域おこし協力隊」として羽後町に着任。協力隊として３年間活動する中で、仙道地区の地域づくりにも携わっていた。地域おこし協力隊の任期満了後、今年５月に町の集落支援員として委嘱を受け、現在活動中。

地元住民ではない、いわゆる「外から目線」という部分や、サラリーマン時代の経験や協力隊活動を通して得てきた部分とを合わせながら、地域の中で、地域の人たちが活動しやすい環境づくりや事業のコーディネーターという立場で関わっている。

（Ｆ氏）

秋田県立湯沢翔北高等学校専攻科生産技術科２年生。専攻科は、高校卒業後２年間学ぶ教育機関。生産技術科では、大学と同じく講義は１コマ９０分で、１日４コマ勉強している

座学では秋田県立大学教授から講義を受けているほか、実践面では秋田エプソン株式会社など外部講師、高度熟練技能者から実技指導を受け、地域の即戦力になれるよう頑張っている。

（Ｇ氏）

４年前の７月、羽後町三輪地区に障害者総合支援施設「すみれ」を開設した。就労継続支援Ｂ型施設で、現在１９名が登録。毎日ほぼ全員が出勤。出勤率が高いのが特徴。私自身、住まいから片道１時間の通勤時間を要するが、それが苦にならないほど明るく楽しい施設。当初、農福連携中心に訓練支援を行うことを理想にスタートしたが、現実的な難しさもあり、現在は室内作業が増えている。そうした中、農業部門では、一般農家に劣らないネギや小玉スイカを作付けし、市場に出荷している。小玉スイカは、郵便局のふるさと小包に選ばれるほど、そのおいしさに定評がある。

（Ｈ氏）

この会場から数分程度のところに位置する、秋田エプソン株式会社に勤務している。当社ではプリンターや腕時計の中身の組立てなど、生活に身近な製品をつくっている。

私は、ふだん採用担当として、小中学生や高校生はもちろん、多くの地元の方に、企業の魅力や地元に残るメリットなどを伝えている。自社だけでなく、地元のいろいろな企業を学生に見ていただき、最終的には地元湯沢に残ってもらって、秋田を盛り上げてほしい。

地域の子どもたちには、こうした期待を抱いている。

日頃、「桃栗3年柿8年大作戦」と題する活動を展開。これは、果樹を植えたら実がなるまでそれなりに年月がかかるという意味。将来的に採用に結び付くには、長く年月をかけないといけない。とにかく、地域に子どもたちが残ってほしいという思いで活動を展開している。

（B氏）

隣市の普通高校を卒業後、秋田県立湯沢翔北高等学校専攻科介護福祉科に入学した。介護福祉科では、介護福祉士国家資格取得に向けて、専門的な授業や講義、実技指導を受けている。このほか、地域で御活躍されている方々を講師に迎え、ガーデニングや書道、郷土食等のレクリエーション技術の講義など、地域文化に触れる機会も多い。

1年生から施設実習で実際の利用者に関わる機会があり、とても勉強になっている。

（C氏）

セブン-イレブン雄勝こまちインター店オーナー。私の店では移動販売車があり、店舗のある雄勝こまちIC付近から、旧雄勝町を中心に、平日は移動販売で回っている。

日頃活動していると、単なる買物弱者への支援ではない部分を担ったり、高齢者が困っている生の声を聞くことも多い。今日は、自分の活動が少しでも県政のお役に立てればという思い。

意見交換（前半）

（司会）

では、これから意見交換に入りたい。今日集まっていたいただいた方々は幅広い年代、いろいろな分野の方々。知事からも「共生社会という大きなテーマで議論をするのは非常に難しい」との話があり、改めてそう感じたところ。

実際、「共生社会」は単に共に生きるという意味だけではない。昨今「共生社会」という言葉が多く用いられる一方で、「それって一体何？」と、捉えにくい言葉だとも感じる。このため、今日はこの言葉を私なりに言い換え、「お互いさまの社会」としてみたい。「お互いさま」とは、支えてもらう感覚ではなくて、どちらも支え合う社会という意味。この共通認識を持って、今日の意見交換を進めていけたらと思う。

では、日頃具体的にどんな考えで活動をしていらっしゃるのか、お話を伺いたい。

（F氏）

今日は、日頃授業の一環で取り組んでいる福祉機器コンテストの出品作品を持参した。持参したのは、過去に先輩たちが取り組んだ機器（2016年度優秀賞受賞「打てるんです」）。障害を持っている方でも、卓球の動作が楽にできることを狙いにしたラケット。

（知事）

これを作ったきっかけは。

（F氏）

卓球だと、年齢に関係なく遊びやすい。握力の弱い方でもできるのでは、という発想からつくったもの。

（司会）

専攻科に入ったきっかけや将来展望などを教えてほしい。

（F氏）

高校在学中、担任の先生から、専攻科では電気と機械の両方を学べて、就職にも有利とアドバイスされた。専攻科卒業後は、地域企業に就職し、即戦力として頑張っていきたい。

（知事）

多くの人が東京など県外に就職してしまう中で、あなたは最初から地元を考えていたのか。県外を考えたことは全くなかったのか。周囲の友達はどうだった。

（F氏）

私は、高校卒業後は地元に残るという考えでいた。たしかに外を見たいと思ったこともあったが、自分は秋田の方がじっくりくる。私の周囲の友人たちは、県外、県内、半々だった。

（知事）

秋田に残ってくれてありがとう。

（B氏）

介護福祉科では、専攻科入学後間もなく、車いすを用いた買物外出支援の講義がある。車いす利用者が、外に出るとどのような危険があるのかを確認しつつ、我々がどう支援すれば買物しやすいのか、などを考えるもので、実際、利用者目線になってみることで気づくことも多く、利用者第一に考える上ではとても有益だった。

また、医療的ケアの実習などもある。口からの痰吸引を行う実習では、実際に人形を使いながら指導を受ける。このほか、看護師、保健師など幅広い専門分野から外部講師を迎え、学んでいる。

（知事）

専攻科で得られる資格は。

（B氏）

介護福祉士国家試験受験資格で、実技試験免除になる。

（司会）

介護福祉科を目指した理由は。

（B氏）

私は高校生のときから地元で介護福祉士として働きたいと考えていた。介護福祉士国家資格が得られること、少人数で授業が受けられるということ、更には経済面で両親に負担をかけたくないという理由から、この条件が全てかなう専攻科に入学した。

（司会）

私自身も、専攻科介護福祉科で年２回ほど講義を受け持っているが、専攻科の学生は、とても熱心に学んでいるという印象がある。

福祉系学校への進学も、一旦、県外に出てしまうと、なかなか県内に戻ってこないのが現実。そういう意味において、地元で福祉を学べることは、地域にとって大きな強み。

地元で人材を育成し、地元に残って回っていくという仕組みがすごく良い。また、Bさんのように地元で頑張ってもらっていることは、とてもうれしい。

（E氏）

私は、今まで協力隊として地方創生のプロジェクトに関わる傍ら、仙道地区の支援をしている。支援活動において最初に気づいたことは、どこまで地域がやるのかという境目が不明瞭だということ。地域の方々にも「地域を何とかしたい」という思いがある中で、地域が取り組む事業の事務局を担いながら、住民がやりたいことを実現できるような組立ての手伝いをしている。

「お互いさまスーパー仙道てんぼ」では、２９年度、総務省の交付金事業を活用した事業が採択された。会社組織とは異なり、利益追求ではなく、とにかく地域をよくしたいという思いの中で、住民の皆さんが一生懸命取り組んでいる。地域に根付く活動を目指す私も、これを手伝いたいと、この事務局に手を挙げた。

現在は店舗運営のサポートをしたり、地域が取り組む事業を手伝ったり。支援員として直接パトロールをすることもあるが、それ以上に地域の方々が自分たちがやりたい形でどうやっていくのか、実現させることに重きをおいている。

地域への思いは、人によっても様々。また、地域内にもいろいろな組織がある。ベースには集落があり、更に地区振興会、社協や老人クラブなどの組織が重なり合い、これらが一枚岩になって動いているところに、仙道地区の魅力を感じている。

地方創生関連事業にも引き続き関わっており、個人としては、先月これに関連するNPO法人を立ち上げたばかり。引き続き、地域づくりと地域おこしの両方をやっていきたい。課題は、地域の思いと事業展開とがなかなか重なり合わないところ。ここに歯がゆさを感じている。今後、どういう進め方をしていくか、体制なども考えていきたい。

（知事）

兵庫県からきて、秋田は全く違った環境だと思うが、どうか。

（E氏）

サラリーマン時代は、東京半分、全国半分出張という生活。全国４７都道府県全てを訪れているが、中でも一番訪れた回数が少ないところで秋田を選んだ。

秋田でも、都市部から離れたローカルエリアの羽後町は県内でも有数の豪雪地。私の出身地兵庫県西宮市は２cm積もっただけで大パニックになる。この豪雪地が面白そうだと、刺激を求めた部分もある。今では、除雪や雪下ろし作業を楽しくやっている。

（知事）

都市部と地方の農村部を比較すると、連帯感の有無やその度合いに違いがある。農村部では、連帯感やつながりが、かえって若い人にとって負担になるという見方もあるが、そのあたりはどうか。

（E氏）

私はもともと人とのつながりが好きな方で、そう負担に感じない。ただ、一般的には若い頃は枠にはめられるのが嫌だったり、都会にいきたいという気持ちもあると思う。

今、自身のNPOの活動を通して、首都圏など都市部で秋田出身の皆さんと会うことも多いが、話を聞くと、一旦出た後で地域とのつながりを求める部分もあるようだ。年月をかけて地域に対する思いは変わっていくもの、というのが私の捉え方である。

つまり、若い人たちも地元に残るかどうかが、多様な選択ができた方がよい。その選択肢を増やすのも自分の仕事だと考えている。

（C氏）

セブン-イレブンの移動販売車「セブン安心お届け便」で、山間部や一人暮らし世帯を回っている。移動手段がなく、買物に行くことが困難な買物弱者への買物支援の中で、お年寄りの話し相手や安否確認等、できる範囲内で地域に密着した活動を行っている。

店舗は2015年にオープン。農村部、人口もそう多くない旧雄勝町にあり、御用聞きとして配達サービスを宣伝する中で、高齢者から話を聞くと、「店に何があるのか分からない」とか、「コンビニは若い人たちの店」という感覚があった。また、「実際に商品を見て決めたい」という気持ちも強く、なかなか思うようには進まなかった。

こうした中で、本部に地域の現状を含めて何度も打診をし、この車両の導入となった。当時、移動車両は全国で40台足らずしかないという状況の中、参考事例もなく手探り状態。始動して気づいたことは、単なる買物手段としての役割ではなく、私自身がお年寄りの話し相手だったり、移動販売車が到着する場所自体がコミュニティの場になること。例えば、移動販売車の到着に合わせて出てきた高齢者が、帰りは一緒にお茶飲みに行ったり、あるいは「今日、〇〇さんがいない」という話が出ると、誰かが「〇〇に行っているよ」と教えてくれたり。

地域の皆さん同士による自然な見守り活動ができる場でもあり、私の活動が、いろいろな意味でコミュニティ機能を果たしていると感じている。

（知事）

移動販売車は購入したものか。採算は採れているか。

（C氏）

本部から提供された。移動販売自体は、実際、採算には合わない。

（知事）

昔は移動販売車は結構あったが、扱う品物の範囲が限られ、冷蔵設備もないため、徐々にすたれていった。ところが、今や、都市部においてもコンビニや移動販売を一番必要とするのは年配者。コンビニ＝地域のキーステーションといえる。問題は地域性をどう出していくか。これは本部の問題で、品ぞろえの良さを生かして、地域に何が必要なのか、このデータを生かしていけば、第2の行政ステーションにもなり得る。

（司会）

知事がおっしゃるとおり、コンビニの数と住民の身近さと、十分、地域拠点になり得ると思う。ただ、業界間の競争もあり、現実的な大変さもあるのでは。始めたきっかけは。

（Ｃ氏）

私は、一旦県外に出たが、いずれは秋田に帰ってこなくてはと思っていた。コンビニ経営は、形はどうあれ自分の店を持ちたいとの思いから。大げさかもしれないが、自分を育ててくれた地域への恩返しで、自分のできる範囲で地元貢献したいとの考えがある。

（Ｈ氏）

先日、開催された振興局主催「中学生向けしごと博覧会」に出展した。以前は高校生向けしかなかったが、「桃栗３年柿８年作戦」にかける会社方針とも重なり合い、振興局とも話をして、中学生向けが実現したと感じている。

とにかく地域企業を知ってほしいという気持ち。学生は県外に目を向けがちだが、地元に残ったときにどんなメリットがあるのか。生徒や学生とのコミュニケーションを図っている。そのほか、小中学生を対象に、体験型工場見学も行っている。簡単な設計をもとに部品をつくり、組み立てられる簡易式時計をつくってもら。概要説明だけではイメージが湧かないことも多いが、実際に体験することによって、地元こんな会社があったと記憶に残る。こうして、いろいろな企画をして、将来的に地元に残りたいという子どもが増え、地域雇用に結び付けば、との思いで取り組んでいる。

（知事）

工場も拡張しているが、採用状況はどうか。

（Ｈ氏）

高卒採用は例年、２０名程度の採用を計画。毎年、地元や近隣市町村から採用できている。

大卒採用は、近年、売り手市場のため苦労しているが、インターンシップなど、早期から学生と接点を持つ取組を行う中で、最近は５～６名程度採用できている。

（知事）

生徒もそうだが、特に親御さんが、意外に自分の町にどんな企業があるか知らない。本社が東京にあっても、その子会社や系列企業が地元にもあり、良いものをつくっていることを知るべき。私は、以前から中学校はもちろん、小学生の段階から工場見学などの取組を積極的にやるよう話していた。親御さんやＰＴＡをターゲットに仕掛けていかないと。地元企業の魅力が地元伝わると、地元志向はもっと増えると思う。

（司会）

私が所属する法人も、同じく「中学生向けしごと博覧会」に出展しているが、秋田エプソン株式会社のブースには行列ができるという話を聞いてうらやましく思っている。企業イメージが良い上、次世代の取組にも力を入れているとの話を伺い、非常に素晴らしいと感じたところ。

（知事）

秋田には、いまだに「立身出世は東京で」という考えがある。最初から首都圏志向であればともかく、地元志向にもかかわらず、情報不足ゆえに仕方なく東京に出てしまうという現実をどう食い止めるか。県、企業、産業団体がネットワークで取り組まないといけない課題。そういう意味で、企業に地元定着対策に積極的に御尽力いただいているわけで、

感謝したい。是非、これからもどうか協力をお願いしたい。

（司会）

まさに地域を代表する大企業、秋田エプソン株式会社の強みを生かしていただければと思う。

（G氏）

障害者が、地域で普通に暮らせる基盤づくりが私たちの目標。農業生産活動や内職作業を提供し、自立した日常生活が営めるよう支援している。スイカのポリパック作業には、内職部門の利用者も加わり、磨き、シール貼り、箱詰め作業などを行っている。

ネギは市場に出荷するため、全て手作業で大きさを選別しているが、出荷の上では白い部分の長さなど、規定をクリアしないといけなことも多い。電子部品は、湯沢市の株式会社チバ・テクノからいただく作業。利用者は、集中力を発揮して一つの作業に取り組んでいる。企業側の納品期限を厳守しており、これまで品質上もクレームがあったことはない。

農福連携は、当初、理想を掲げて開設したものの、現在は利用者19名のうち農業部門がたった3名、そのほかの16名は室内作業に従事する。利用者の平均年齢は35歳と、就労継続支援B型としては比較的若手が多いが、様々な障害特性などから一般就労は難しい。

（知事）

農福連携への取組は非常に難しいものがある。工福連携との比較において、工業製品の部品組立てなどは、反復作業で取り組みやすいものもある一方で、農作物は品目や天候などの諸条件によって、扱う内容が全て違ってくる。農業は健常者であっても非常に難しい分野。

（G氏）

農業は、作業時間一つとっても、一般農家の作業時間（朝早く夜遅く）とは異なることや、体力的な差などもネック。

（知事）

作業のマッチングは、障害者の障害程度や特徴によっても様々。現場の実態を知らない人は、農福連携を理想で語りがちだが、どの農作物が向くのかなども含めて、しっかりと仕分けすべき。これは私がもともと持っていた持論だが、今の話を聞いて自信を持った。

（司会）

小玉スイカを選んだ理由は。また、利用者の平均工賃は。

（G氏）

羽後町が小玉スイカ発祥の地と言われていること、核家族で大玉スイカの購入を手控える昨今の嗜好の変化から。また、障害者でも持てるサイズであること、実際の販売売上なども考慮したり、いろいろな考えから選定したもの。出荷の際、この小玉スイカを入れる箱のイラストは、羽後町のPRも兼ねている。

工賃は、昨年度は1万9,000円ほど。県南の同種別施設の平均よりはずっと高い。

(D氏)

岩崎地区生活サポーターの会では、除雪だけでなく、1年を通じて地域でどんな手伝いが必要とされるのか、住民のリクエストを聞きながら運営している。近年は、除草や墓掃除、犬の散歩など多様化しているが、対応できる範囲でこなしている。住民要望は、ここ「かしま館」を窓口に、サポーターの会に伝えていただく。

豪雪地で、大雪のときは雪下ろし業者もなかなかつかまりにくく、間に合わない。サポーターの会で請け負う除雪や雪下ろしなどの冬季作業は、1年間で約150万円、早朝雪かきを合わせると約170万円ほどの仕事がある。

一方で、会を維持する上では運営費もかかる。何年か前から、振興局から県道草刈りの業務委託を請け負うようになり、収入源として非常に助かっている。組織にとって自らの活動で財源を賄えることは、まさに理想の形。こうした業務委託事業は是非とも継続してほしい。

(知事)

岩崎は湯沢の中でも歴史の古い町、最盛期より人口が相当減っているのでは。空き家はどうのくらいか。

(D氏)

現在は、岩崎全体で50軒ほど。独居老人などの家も相当あり、10年後にはこの倍になる可能性もある。ただ、湯沢工業団地に近いことから、アパート入居者や新築家屋も徐々に増えており、県や市に比べて高齢化率は低い状況にある。

また、大変ありがたいことに、最近、岩崎地区の古い建物を巡るまち歩きに、各地から訪れる人が少しずつ増えている。

(知事)

我々の世代は、湯沢といえば岩崎地区が思い浮かぶ。それほど歴史のあるところ。

県管理道路の草刈り作業の業務委託は、今の時代にフィットしたもの。というのは建設業は人手不足で、本来業務で手一杯。草刈りまで手が回らない。その点、高齢者や農家の方は作業も機械操作も慣れている。草刈りや簡単な水路保全などやれる部分でよい。建設業の人手不足部分を地元がカバーできれば、非常に良い循環になる。当然、一定の対価を払う。これがうまく回れば地元の収入源にもなり、更にこれを財源にコミュニティ活動が生まれる。とても良いパターン。まさに、人手不足がプラスに転じた例。

(司会)

ひととおりに話していただき、後半部分につながるいいキーワードも出てきたように思う。

話題提供

「明るい地域をつくるために」

- ・湯沢市協働事業推進課 協働のまちづくり班班長 佐藤 邦彦
「参加・協働のまちづくりについて」
- ・湯沢市福祉課 地域福祉班班長 佐藤 美奈子
「地域のつながりの拠点の取組について」

湯沢市職員が地域自治組織支援職員として関わる事例などのほか、今年10月に開催される「第2回地域共生社会推進全国サミット in ゆざわ」の開催背景や趣旨などについて紹介。

（知事）

湯沢市の地域自治組織支援職員の配置は、非常に良い取組。私も秋田市長時代、同じ発想で、学校の先生、市職員、町内役員と一緒に通学路点検を行ったことがある。やってみると、街灯や側溝の不具合、道路の穴ぼこ、倒壊危険のある建物の確認などいろいろ出た。作業が終わると会費制で飲み会を開き、互いに仲良くなる。市職員もここで聞いた話を、「自分は部署外だが、担当に伝えておくよ」となる。年に2回くらいでいい。地域の清掃活動や安全点検など、簡単なことから共同作業を始めるとよい。

意見交換（後半）

（司会）

では、ここからは後半に入る。「地域共生社会」をキーワードに、皆さんが目指したい方向を考えていきたい。地域の支え手と支えられる側。見方によっては、実は、それぞれがこの両面を持っている。例えば若い学生、あるいはシニア世代。地域に応援されているようで、支え手側だったり。互いに支え合う存在であることに気づく。前半をうけて、話を聞いてみたいということがあれば話していただきたい。

（D氏）

私も含め、会員の多くが、本来支えられる世代。今後、会員の高齢化は間違いなく進む。一方で、若い世代は子育てや学校で忙しく、よほどのことがないと地元行事に参加できない。若い世代をどうやって地域活動に巻き込むかが課題。

役所の職員は、当該部署にいとすごく頑張ってくれるが、異動すると、途端に遠い存在になってしまう。地域全体の問題にも関わることであり、もっと効果が上がる取組にした方がよい。

（司会）

支え手側の負担感やプレッシャーなど、若手に話を聞いてみたい。

（F氏）

私は、地域を盛り上げていこうと意識したことは、あまりない。ただ、支えていけないという気持ちはある。私の祖母は寝たきり。自宅で介護の手伝いもしているが、そういう部分で年長者を支えていけないといけない、と感じている。

（B氏）

私は「支えていけない」という気負いはない。介護の仕事は、これまでの時代をつくってくださった方々の最後の部分を支援させていただくもの。だから、私は「支えていきたい」という気持ちの方が強い。

介護の仕事は、とにかく「汚い」「危険」など3Kのイメージがつきまとう。施設実習などで利用者と一緒に過ごす感動もある。介護を通して地域の方々を支えていきたい。

(D氏)

無償ボランティアでは持続が難しい。働くことによって、少しでもいいから対価を払う仕組みだと、活動にも入ってもらいやすく、組織の活動も持続する。

(司会)

実際、貢献することで何かしらの対価や達成感など、メリットがあると、また頑張ろうという気持ちにもつながるように思う。

Eさんは、地域活動をしていく上でエネルギーになることはあるか。

(E氏)

ボランティアには有償という形もある。実際、県管理道路の草刈り作業の業務委託は、仙道地区でも請け負っている。地域として行うことなので、参加してくれる人たちにどう共感してもらうかという部分を、運営側は考えてやっている。若い人の巻き込みについて、仙道地区では、若い世代に地元のお祭りや住民運動会を丸々任せている。これが、地域活動に自然に関わってもらう入り口にもなり、地域への愛着も湧く原理にもなっている

プレッシャーを感じる前に、そもそも何をしないといけないのかも分からない部分や、どう地域のことを考えていけるのかという部分、こうした取組を一緒に話し合う場も必要。湯沢市から話題提供のあった、地域コミュニティをどうつくっていくかも大事になる。

私は外からきた人間なので、羽後町とか湯沢市とか市町村域ごとの感覚はあまりなく、もっと広域的だったり、あるいはもっとミクロな視点で捉えられたりもする。今後、ますます人が少なくなる中で、周りとの連携をどうやっていけるか、Cさんのような企業との連携、あるいは支援してくれる人たちをどう取り込んでいけるのかという目線も必要だと感じている。

(司会)

実際、Eさんは地域づくりにやりがいを感じておられる。Eさんのように県外からお越しいただいた方を、地域おこしの部分でもっともっと頼ってよいかもしれない、とも思う。

(知事)

無償ボランティアは、楽しければ無償でもやる。例えば、うどんエキスポの高校生ボランティア。あれは楽しさがあるからで、お金を得たいなどとは思っていない。これとは別に、本来、行政がやるべき部分を担う場合は、有償もあり得る。ただし、税金を充てる以上、補助金交付先の団体には一定の要件整備も必要になる。

県外移住者からは、秋田では休みの日に休めないと指摘される。日曜、家族それぞれにいろいろな用事が重なり、家族一緒に過ごす時間がない。第3日曜をあきた家族ふれあいサンサンデーとして設けたが、今やこれも有名無実。この改善が少子化対策になるとも指摘された。私もたしかにそう思う。面白いのはアメリカ。土日には礼拝があるので必ず休む。このため、土日に仕事をしたり、用事を入れることに罪悪感がある。これは日本の風土と合わない部分もあるが。

共生社会をつくる基盤は、実は家庭にある。家庭が原点。家庭がまとまらないと地域もまとまらない。

(司会)

私も、支え手になるためには、自分自身にエネルギーがなければいけないと、気になっ

ていた。

これまでの話の中で、人手不足の解消も共生社会の一つの観点ではないかと感じている。こんな部分で連携を考えたい、という考えがあれば話していきたい。例えば、岩崎地区と秋田エプソン株式会社とは、距離も近い。連携という点で、岩崎地区から、会社に対して何か提案などあればお聞かせいただきたい。

（D氏）

毎年夏にエプソンまつりがある。その際、岩崎地区の盆踊りと岩崎音頭を披露させていただくなどの交流がある。今後はこれに加えて、何かお互いできることがないか、秋田エプソンに限らず、工業団地にある12社ほどにも声がけしていただけたらうれしい。お互いを知る上で、話合いの機会を持たせていただければありがたいと思う。

（H氏）

弊社の夏まつりには、地元農家から野菜販売にお越しいただいている。最近、地域の方々のつながりの重要性、つまり企業活動を営む上で、地域の皆さんに受け入れていただくことが大事だと感じている。我々からも「こういうことをしたいがどうしたらよいか」というような相談や、採用活動においても地域の皆さんの御提案などをいただき、一緒に進めていけたらと思う。

（知事）

例えば、会社構内の花壇の手入れや、周辺外構の植木の剪定など。農村部だからこそ得意な人が地域にたくさんいる。これを有償ボランティアという形で、地域に依頼する。そうすると、地域の方がその企業をいい企業だとあちこちで宣伝し、更に企業イメージが向上する。親御さんの印象もますますよくなり、うちの子を、孫をそこに就職させたい、と回っていく事例が、県内にいくつかある。数万円程度の規模で構わない。地域の方々にとってもありがたい、有償ボランティアとしての活用。これは、企業と社会との共生の良い例と思う。

（司会）

Cさんの活動を知って、地域にセブン-イレブンがあるという強み、更に地域で移動販売してくれるという存在自体を、地域の方々にもっとありがたみを感じてもらえたらと思ったところ。Cさんの活動において、地域と何かコラボしたいことはないか。

（C氏）

平日のみ各方面に回り、土日祝日は地域のイベント行事があれば回っている。移動販売車両をまず地域の皆様に見ていただく、知っていただくというところがスタート。

住民からは、取り扱っていない商品をリクエストされることもしばしば。例えば、鮮魚、彼岸用の供花、介護用おむつ、虫刺されの薬、はたまた「近くまで乗せてほしい」というリクエストまで。要望に添いかねるリクエストの場合、近くに協力店舗があれば、地域内でうまく注文を回せるようになり、更なるサービス向上にもつながる可能性があると考えている。

（司会）

たしかに、そういう部分で地域内でうまく連携するといい。Gさんはどうか。

(G氏)

現実的な安定運営の上では、農福連携もさることながら、工福連携のマッチングの仕組みがあればベスト。企業側から見て、自社では単価に見合わない単純作業や部品組立てなど、この部分は障害者施設にシェアできるという作業があるはず。こうした情報を、企業と施設が互いに共有し、詳細を相談できる仕組みが整っていれば、マッチングしやすい。施設には様々な規模があり、利用者の障害程度や種類も百人百様。だからこそ必ずやマッチングする仕事はあると思う。この仕組みを提供してほしい。

(司会)

人手不足の時代、障害を持っている人の活用がその解消策になり得る可能性も秘めている。労働者として、地域の担い手として十分カウントできる。場合によっては税金を納めることも期待できる。

(知事)

今の話と関連した施策は。

(福祉政策課)

今年度、県でも新たな仕組みを整えたはずである。

(知事)

仕事の受発注に関する、企業と施設双方で情報共有化のシステムがあれば、マッチングがたやすくなる。たしかに、これが一番のネックだ。企業に登録してもらい、詳細のマッチングは個別にやりとりしてもらう。それだと双方やりやすい。

ところで、湯沢翔北高校専攻科学生から見て、何か県に注文したいことがあれば聞きたい。

(F氏)

フライス盤など機械加工の機械をもっと充実してほしい。本校では、2年生になると、授業の一環で、技術習得レベル向上とその客観的確認指標の一つとして、「技能五輪全国大会」や「若年者ものづくり競技大会」への出場を目指し、日々練習に励む。しかしフライス盤の機械が1台しかなく、練習に集中できず困っている。

(知事)

フライス盤か。私もよく分かる。

(F氏)

どうかよろしく願いしたい。

(B氏)

介護福祉科の設備に、特に不満はない。

一つお願いするとすれば、専攻科の認知度が低く、もっと多くの人に知ってもらいたいこと。

（知事）

今は何人いる。

（B氏）

1年生が8人、2年生が11人。どちらも定員20名に満たない。県に、もっとPRしていただきたい。

（知事）

あなたの仕事はこれから一番不足する分野。ますます専攻科の存在は重要になる。

（G氏）

当施設の作業場の広さは87㎡しかなく手狭。ここで内職作業16名と指導員3名、合わせて19名が仕事している。建物は借家で2階建て。資金がなく、改築には一切手がつけられていない。

障害者のグループホーム新設の際には活用可能な補助金があるが、NPO法人が運営主体だと活用できる助成金がなく、困っている。増改築に利用できる補助金または助成金があるとありがたい。農福連携事業では、トイレや作業場整備費用など農林水産省の補助金メニューがあるようだが、厚生労働省サイドにおける同様の補助金の情報を知りたい。

（知事）

これは、持ち帰って宿題としたい。

（司会）

先ほど知事から話があったとおり、湯沢翔北高校の専攻科はまさに地域の強みと思える。授業料が低廉なことも、子育て世代にとっては助かる部分。県にはもっとPRしていただけたらよい。

（知事）

専攻科という名称自体が、住民に分かりにくいのかもしれない。もっと分かりやすい名称にしてよいのでは。

（司会）

専攻科のような、地元の若手人材の育成機関は、地域企業への就職にもつながるし、地域にとって非常に良い循環になるのではないかと思う。

では、最後に参加者一人一言ずつお願いしたい。共生社会、おたがいさまの社会をつくっていくために、それぞれ頑張っていきたいこと、参加した感想などでも構わない。

（D氏）

今日は年代、ジャンルの異なるいろいろな皆さんのお話を聞くことができ、本当に良かった。ともすると、いつも同じ枠の中での活動にとどまりがち。いろいろな人の話が聞けてありがたい。

最後に一つだけ。過疎化に伴い、学校の統廃合が進んでしまい、岩崎地区の小学校も平成23年に統合された。地域から子どもたちの声が聞こえなくなり、さみしくなった。学校も遠くなり、子どもたちが地域活動に参加する時間や機会も減った。こうして、地域の

お祭りや行事への参加が減ると、おのずと子どもたちと地域とのつながりが薄れ、地域への愛着も薄くなり、地域外へと出て行ってしまう。統廃合は、生徒数の基準だけでなく、地域の将来も含めて考えてほしい。

（E氏）

ふだん、いろいろな場に出る機会が多いが、こうした意見交換自体も自分たちの学びに替わって、いろいろなことで頑張っている人たちがいるということを知るだけで、自分自身のエネルギーに変わっていくことを感じている。ふだんの取組では、いかに自分が楽しくやれるか、巻き込み力を発揮できるかを考えているが、今日改めてそれを再確認した。今日の参加者とも、それぞれとどんなことができるか既に考え始めている。このつながりを今後に生かしたい。

（F氏）

今日はいろいろなジャンルの参加者の話を聞くことができ、多くの気づきが得られ、地域課題を改めて知る機会になった。私にできることは限られているかもしれないが、自分なりにやれることに取り組んでいきたい。

（G氏）

障害者と健常者との橋渡し、身の回りの人に障害者への理解を進めて、偏見差別を少しでも減らしていきたい。社会にはいまだに時代錯誤的な偏見差別が根深い部分もある。幼少期からいろいろな人がいて、社会が成り立っていることを知ることが大切と考えている。

（H氏）

これまでいろいろな人とこれまで出会い、いろいろな考えや視点の違いから生まれる発想があったが、今日も様々な方の話を聞き、いろいろな意見から自分のものに吸収することができた。今後もいろいろな形で、多くの方から認めていただき、支えていく側になるよう、自分が中心になって頑張っていきたい。

（B氏）

たくさんの方の意見を聞いて、今後自分が社会で働く上で何ができるか考えるきっかけになった。介護の仕事を通して地域の役に立ちる介護福祉士になりたいと思った。

（C氏）

移動販売の運営上、どうしてもガソリン代、人件費、廃棄コストなど経費がかさむ。行政、民生委員などいろいろな人から声がかかるが、残念ながら採算に見合わない。これは、県内の5台とも同じ状況にあると聞く。

とはいえ、これから将来、私の活動は地域にとって必要だと認識している。地域と連携する上で、例えば、このエリアで移動販売を必要とする人たちがいるという情報を、行政や地域との間で共有し合える仕組みができれば、地域も、店舗も、共に持続していける可能性があると思う。

（司会）

今日、皆さんと出会えて良かった。日頃から、福祉は、生活全般を幅広く支えることだと意識していた。そういう意味でいろいろなジャンルの皆さんとつながることができたことは大きい。今後もいろいろと支え合っていけるとよい。せっかくこうしてできた縁。実

際につながり合えたらいい、と考えている。

知事総括

学校統合については、小中学校の統合背景と、高校のそれとは異なる事情を抱える。学校教育は一定の共同生活の場。入学者がほとんどいないという小さな学校の維持は大変。教員配置基準は決まっているが、むやみに数だけで、統合は避けるべきだとも思う。

秋田市長時代、地域の方や卒業生、同窓会は統合反対者が多いが、新しく学校に入れる親御さんは統合賛成派が多数だった。それは、人数が少ないと部活動ができない、共同生活ができない、成績維持などの問題から。つまり立場が変わると、受け止めも異なる。このように、小中学校の統合は非常に難しい。統合後もスムーズに通学できるような環境整備をしつつ、エリアを広く持ち、地域全体の学校だと意識する、そんな統合の仕方もある。

高校は、地域の産業構造によって大きく違ってくる。例えば由利工業。あのあたりの生徒数は減っているが、航空機産業が盛んになったために、その学科が必要になり、さらに、強化する必要も出てくる。こうして、地域産業が盛んになると、これはまさに統合ではなく残すということにもなる。

障害者への理解。これは、日本が形から入る社会で、気持ちから入っていかないため。ヨーロッパでは、すごくバリアフリーが進んでいると思いきや、実はそうではない。フランス、ドイツなどは昔からの町並みのまま、坂も石畳もそのまま。日本のようなスロープなどない。ところが、パリの雑踏。車いすの人を見かけると、道路では車を止めて、運転者が降りてちゃんと渡してくれる。バリアフリーをまさに実践している。日本の場合、心のバリアフリーがまだまだ遠い。

コンビニと地元との協調については、コンビニが入り始めた時代、地元や商工会はよそ者扱いした。ところが、今ではコンビニがないと地域社会は成り立たないほどになった。この、コンビニはよそ者という意識が、依然として地域にあるように感じる。

県はコンビニと地域活性化包括連携協定を結んでいる。地域の商工団体は先に立って、コンビニと地元商店とを近づける仕組みづくりに力を入れるべき。そうすることによって、双方に利益をもたらすようにも思う。今後は、コンビニとの共存を、地元がいかに認識するかがカギ。

今日の意見交換ではいろいろな話を聞けて、大変勉強になった。どうもありがとうございました。（了）